

小野小町  $259^P$  上 4行と5行の間に挿入する。  
 $5.577^P$ .

コクヨ ケー20 20×20

- ・カラー
- ・頁の上半分に、

大きくはみ出されて

掲載下さい。

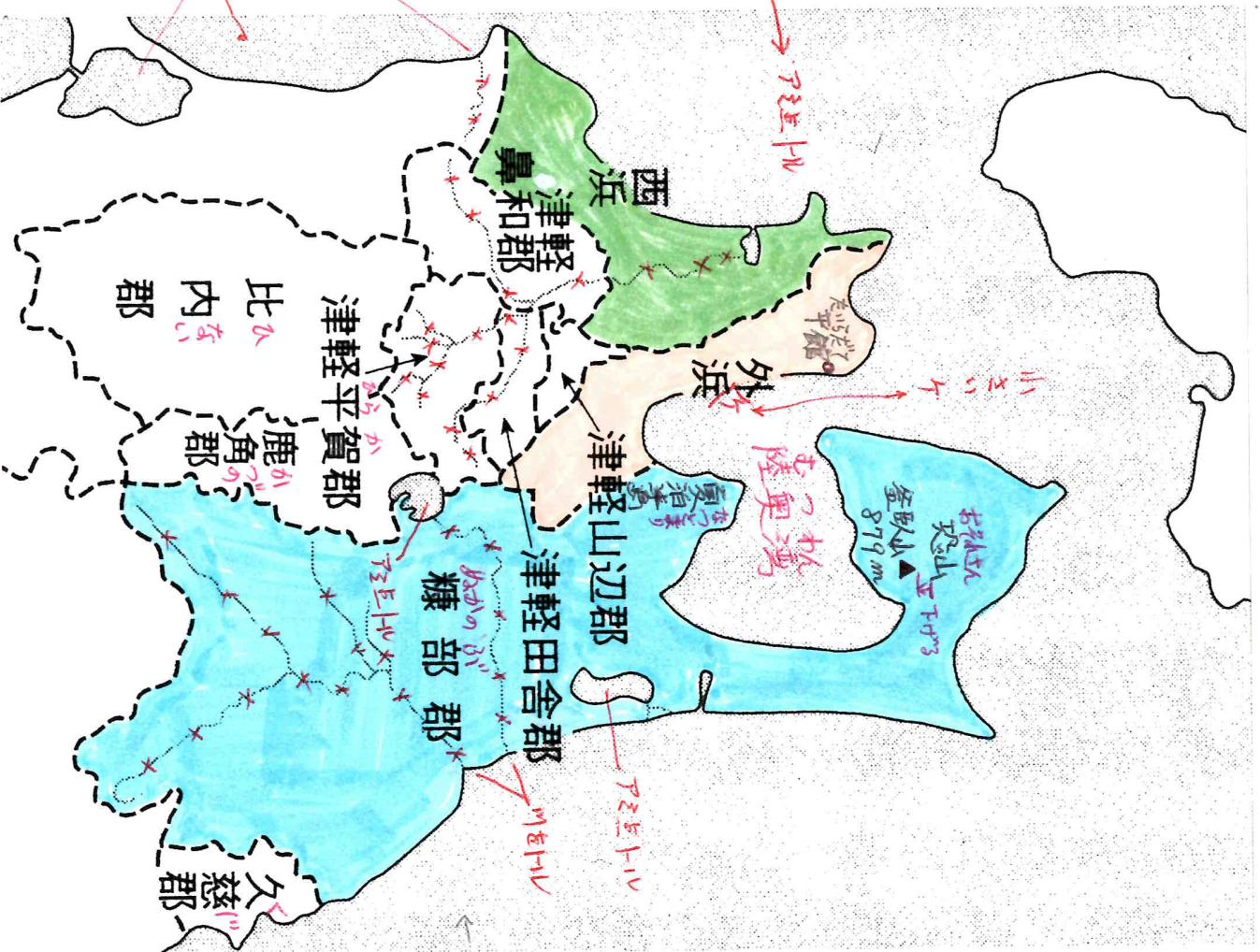
たいらたゞ  
平館→

- ・あみん
- ・網点金いん
- (海・湖・入江など)

- ・トースト下さい。

- ・全部ゴチ
- ・大きな字にして下さい。

5,578P



たのしみ  
259P  
18P  
8x2  
=18P  
18P  
234

1404

1304

第551図

青森県の歴史と長谷川成一

外ヶ浜を中心とする郡郷制図

他

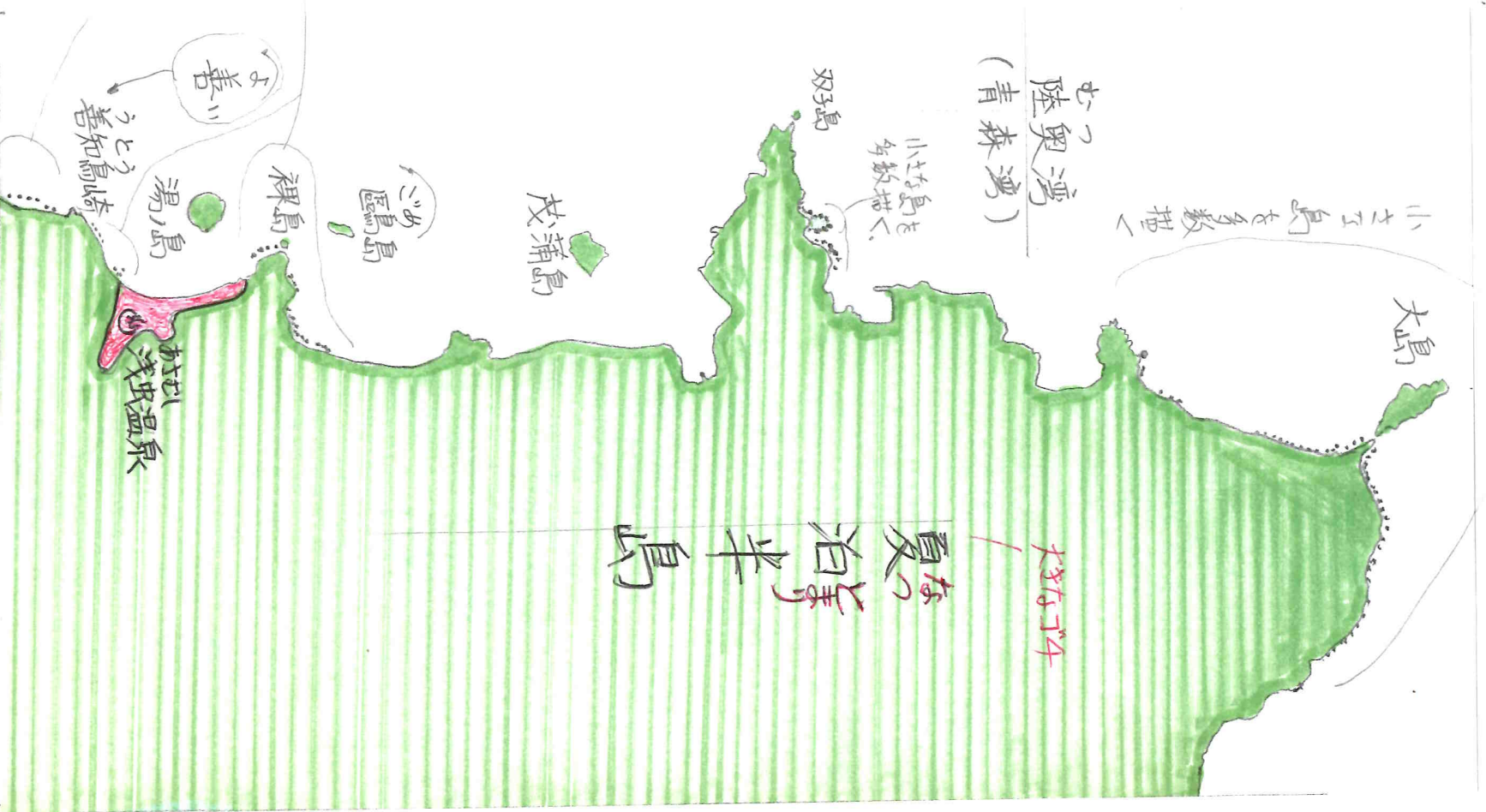
山川出版社、2000年2月25日発行、80頁参照



・カラー  
 ・右頁の右側半分  
 上下段にわたって  
 大きく掲載下さい。

・数字は、全てゴ4

5,579P



地名辞典 1150P  
 なつとまり 夏泊  
 白鷺地 30頁 夏泊半島  
 235

5597P  
 5597P  
 5597P

1404  
 第55図 夏泊半島西岸地図

平成5年10月1日付国土地理院発行の5万分え1地図「浅虫」「脇野沢」参照



全て10QG→  
で入力下さい。

<sup>うとう</sup>  
善知島崎

湯ノ島

5,580'

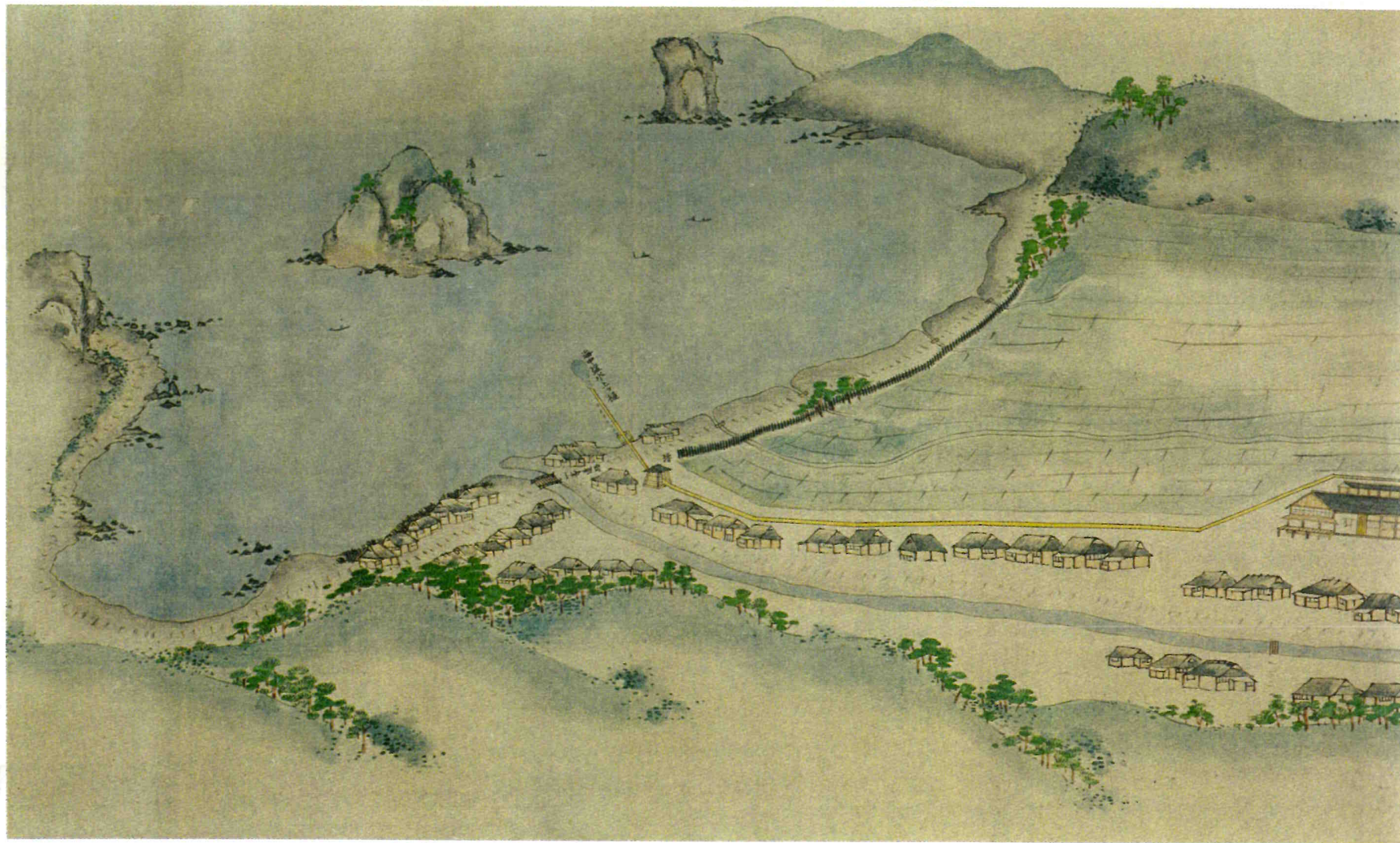
ハダカ島

<sup>なつと判</sup>  
夏泊半島

・カラー  
・左頁の上半分に  
大きくはみ出して  
掲載下さい。

・出来るだけ、  
明るく、  
鮮明に  
お願いします。

・著作権許諾  
は、不要だと思  
いますが、  
念のために尋ね  
下さい。



中へふりわけ

10QG

〔温泉熱を利用した全国でも珍しい製塩場。明治42年(1909)9月、政府の塩専売方針により廃止されるまで稼働〕

13QG

中へふりわけ  
14QG

第553図

<sup>あきあき</sup>  
10QG→浅虫製塩場(海中塩水汲み上げ装置)

右つめ

<sup>あきあき</sup>  
あきあき

浅虫近傍に点在する大小の島々

『新青森市史』資料編6 近代(1) 青森市 平成16年3月発行 口絵26参照



5,581P

親世流10話 うたいのほし

改行

さ描く。  
このところ、口能らへ善知鳥（うとう）では、こ  
う謡って（うたい）いる。（一部省略）  
平沙（へいさ）（平（たい）うな砂（すな）原（はら））に子（こ）を生（う）みて落（お）雁（かり）（空（そら）  
から舞（ま）い降（お）りた雁（かり）に擬（な）して（い）るのた（た）ろう）  
のはかなや。親（おや）は隠（かく）すとすれど（うとうと）  
呼（よ）ばれて子（こ）はやすかたと答（こた）えけり。  
捕（と）られやすかた（うとう）  
親（おや）は空（そら）にて血（ち）の涙（なみだ）を降（お）らせば「血（ち）の涙（なみだ）に目（め）  
もく水（みづ）なみに染（し）み渡（わた）る。  
（娑婆（さば））に（善知鳥（うとう））やすかたと見（み）えしも。冥（めい）  
金（かね）にては、化（け）鳥（ちよう）となり、罪（ざい）人（にん）を追（お）つ立（た）て  
鐵（てつ）の嘴（くちばし）を鳴（な）らし、羽（は）を搏（た）き銅（どう）の爪（つめ）を磨（と）ぎ  
立（た）てては、云々（うとう）  
とある。（「善知鳥（うとう）」親世流大成板「親世左  
近、檜（ひ）書店、平成十五年九月二十五日発行」  
十（十）十一頁参照）  
創作性（そうさくせい）を思（おも）わせ



うたい  
る謡である。

へ親からうとうし（おしはうしオ、あるいは和）と  
呼ばれて、子が「やすかた」と答えた✓  
というくだりには「―――不自然さがあり、  
違和感を覚える。

（＊）

参考までに述べる。「子」の字は「  
①男子の敬称である。  
②人をよぶ敬称である。  
③男子の自称である。」

という。（「漢和辞典」小林信明、小学館、  
へ子参照）

また「管子」春秋時代、齊の管仲著とい  
われるに、  
「子を知ること父に若くは莫く、臣を知る  
こと君に若くは莫し」とある。  
「故事名言辞典」集英社、昭和五  
十一年二月（第1刷）発行、一四八頁参照  
②「荀子」（戦国時代末の荀況著）に、  
「君は舟、臣は水」と見え、いる。（「広辞苑」へ君は舟、臣は水。他参照）



(イ) 主君 (自分) が 仕える 君 (きみ) を  
 (ロ) 臣 (みこ) 君 (きみ) に 仕える 者 (もの) を  
 子 (こ) に 親 (おや) に  
 父 (ちち) と 母 (はは) を 子 (こ) に  
 兄 (あに) と 弟 (いもうと) を 兄弟 (けいだい) に  
 姉 (あね) と 妹 (いもうと) を 姉妹 (せいてい) に  
 妻 (つま) と 夫 (おとこ) を 夫婦 (ふうふ) に  
 父 (ちち) と 母 (はは) と 妻 (つま) と 夫 (おとこ) と  
 兄弟 (けいだい) と 姉妹 (せいてい) と 夫婦 (ふうふ) と  
 親 (おや) と 兄弟 (けいだい) と 姉妹 (せいてい) と 夫婦 (ふうふ) と  
 親 (おや) と 兄弟 (けいだい) と 姉妹 (せいてい) と 夫婦 (ふうふ) と  
 親 (おや) と 兄弟 (けいだい) と 姉妹 (せいてい) と 夫婦 (ふうふ) と


 明白でないものをの下の想像をく

ま  
く  
次  
の  
よ  
う  
に  
考  
え  
て  
み  
た  
ら  
い  
。

(1) 親王 (こうこうてん) の皇子 (こうみ) が、  
「とうとう」  
「う」

的	ト
な	オ
地	シ
位	一
の	と
者	う
（	ト
実	と
は	呼
父	ぶ
・	と
大	い
江	子
惟	ハ
章	子
）	ハ
が	徒
下	属

やすかた  
「安方」と言つた。

(2) ところがある時、陸奥国外へ次の狩師が下

＊何らかのいざこざが あって殺害に至ったの

王の命を奪ったのかは分からな。誰かに依頼されて親

(3) 日能凸へ善知鳥のちとなつた演劇の創作は、そうした事情の詳細を知つていた

にもかかわらず、史実を臆げにすゐため、あ

へえ  
親<sup>おや</sup>が  
う  
とう  
L  
ウ  
ト  
オ<sup>(とう)</sup>  
L<sup>(とう)</sup>  
と  
呼<sup>よ</sup>  
へ  
は  
子<sup>こ</sup>



が「安方」と答えた

という助書きと作り替えたのではなからうか

＊尚、この伝説は既に室町初期に行なわれて

いて作者がそれを本曲に脚色したのであろう

という。「善知鳥」観世左近、一頁参照

(4)根拠は全く無く「あいぶん強引な感もあるが」

△光孝天皇と小野小町との間に生まれた御

子は、「源く安方」という名前だったのか

も知らない

など想像される

＊「源」については「第九章へ近江更衣」

の項において述べた

「うとう」お父

「安方」かりーろ

だが、必死の手当ての甲斐もなく、源く安

方は亡くなつてしまったのだろう。

■青森市安方町に「善知鳥神社」がある。

（写真図版809・810）善知鳥神社△善知鳥舞△参

照）

＊

青森県の方言に「此島」正年著「青森県の方言」の「此島」を  
双葉や「此島」を見ること「青森県の方言」の「此島」を  
「此島」を「此島」を「此島」を「此島」を「此島」を「此島」を



5.585<sup>P</sup>

・カラー

・右頁上半分に、  
はみ出て大きく  
掲載下さい。



13QG

善知鳥神社発行の小冊子  
『境内探訪ガイドマップ』  
表紙参照

「地図でわかる  
神社とお寺」  
武光誠  
帝國書院 20頁  
にも写真有る

12QG

中納言 安方

・中納言 安方によって開かれたと伝えられている。(※安方は、追贈されて中納言になったのではなかろうか)

・「安方の名を後世に伝えたい」と願う人々が謡曲『善知鳥』を作り、『善知鳥神社』を創建したのであろう。

・善知鳥神社には、宗像三女神(田心姫・湍津姫・市杵島姫)が祀られている。

241<sup>P</sup>

← 14頁のみ山、他は川

14QG

写真図版 809 青森市 善知鳥神社

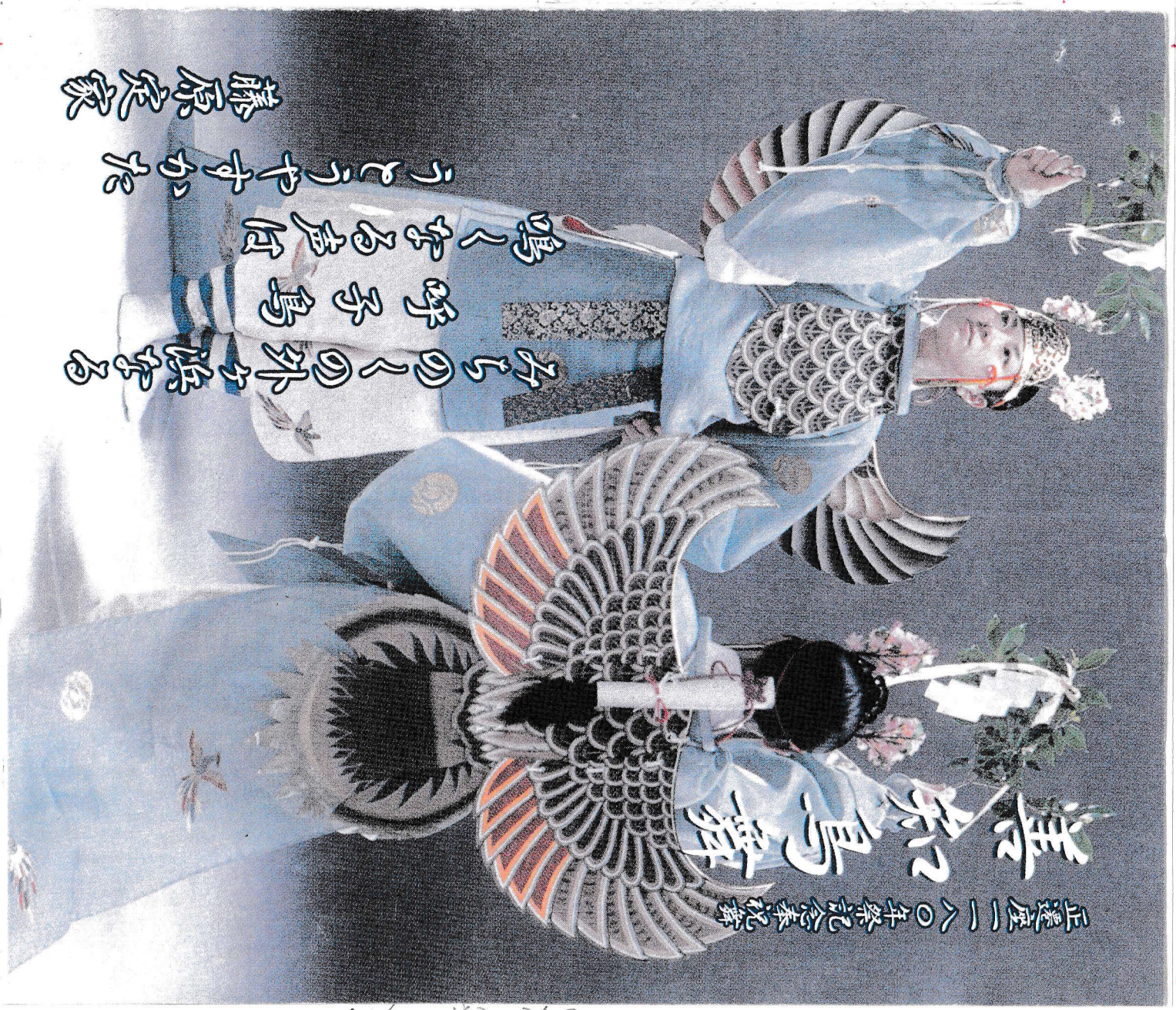


カー  
左側の右端。上、下段にわたって縦長に大きく掲載下さい。  
カチ

6  
カチ

5,586 P

鎌倉時代。  
・八代集みにも無い。  
・新古今にも無い。  
・万葉集にも無い。(索引)



美知鳥舞  
みらのの外の海なる  
鳴く呼子鳥  
うとうやうかた  
藤原定家

1424 写真図版 810 善知鳥舞

当時の伊勢神宮大宮司 慶光院 俊様の特別な計らいにより  
神宮楽部によって創作された舞である。

- 藤原定家(1162~1241)は、安方が亡くなる時の様子を、伝え聞いていたのだろうか。
- 伊勢神宮にも、詳しく伝えられていたのであろう。

善知鳥神社発行の小冊子『境内探訪ガイドマップ』参照

(第13巻) 242

356



5.587<sup>P</sup>

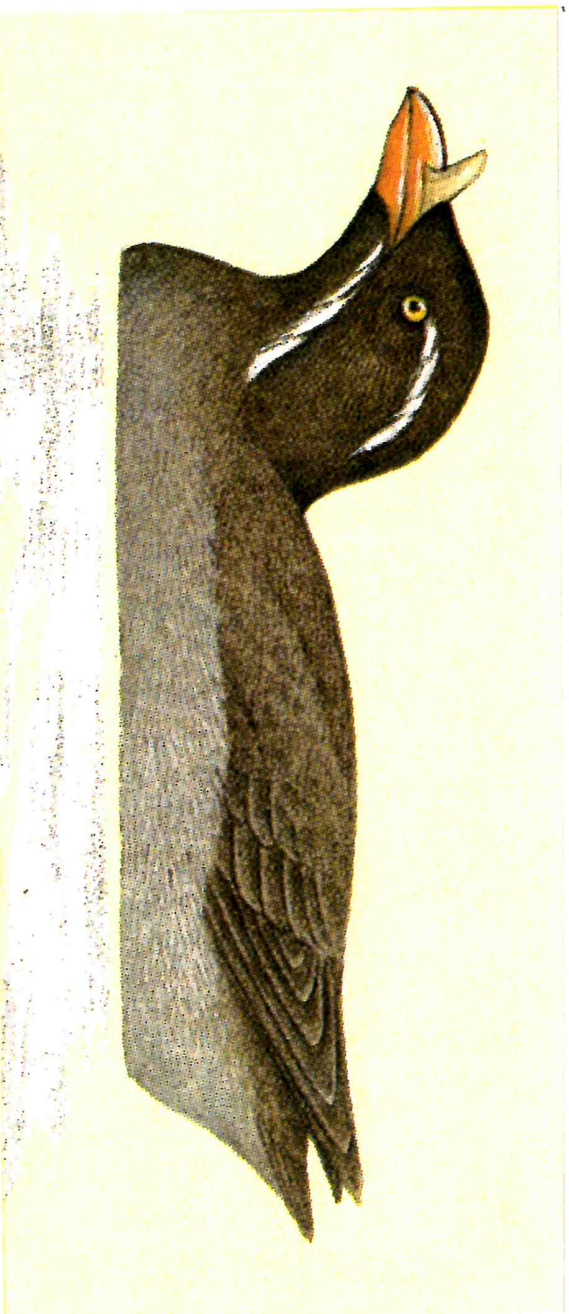
1字アキ

知鳥<sup>と</sup>う  
参照

子<sup>こ</sup>を<sup>を</sup>取<sup>と</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>と<sup>と</sup>鳴<sup>な</sup>く<sup>く</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>う<sup>う</sup>。  
 「<sup>ナ</sup>広<sup>ク</sup>辞<sup>シ</sup>苑<sup>エン</sup>」<sup>ナ</sup>へ<sup>ク</sup>善<sup>ゼン</sup>う<sup>ウ</sup>  
 繁<sup>ハシ</sup>殖<sup>シ</sup>し<sup>マ</sup>。冬<sup>トウ</sup>期<sup>キ</sup>に<sup>ニ</sup>は<sup>ハ</sup>本<sup>ホン</sup>州<sup>シュウ</sup>の<sup>ノ</sup>海<sup>カイ</sup>上<sup>ジョウ</sup>に<sup>ニ</sup>ま<sup>マ</sup>で<sup>デ</sup>南<sup>ナン</sup>下<sup>カ</sup>す<sup>ス</sup>。  
 基<sup>キ</sup>部<sup>ブ</sup>か<sup>カ</sup>ら<sup>ラ</sup>角<sup>ツノ</sup>状<sup>ジョウ</sup>突<sup>トツ</sup>起<sup>キ</sup>が<sup>ガ</sup>生<sup>シヨウ</sup>ず<sup>ス</sup>。  
 北<sup>ホク</sup>方<sup>ホウ</sup>海<sup>カイ</sup>洋<sup>ヨウ</sup>の<sup>ノ</sup>鳥<sup>マ</sup>で<sup>デ</sup>  
 は<sup>ハ</sup>又<sup>イッ</sup>条<sup>ジョウ</sup>の<sup>ノ</sup>白<sup>ハク</sup>毛<sup>モウ</sup>を<sup>ヲ</sup>重<sup>オモ</sup>く<sup>ク</sup>る<sup>ル</sup>。  
 生<sup>セイ</sup>殖<sup>シヨク</sup>時<sup>ジ</sup>期<sup>キ</sup>に<sup>ニ</sup>は<sup>ハ</sup>上<sup>ウエ</sup>嘴<sup>クサハ</sup>  
 ト<sup>ト</sup>ぐ<sup>グ</sup>ら<sup>ラ</sup>い<sup>イ</sup>。  
 背<sup>ハイ</sup>面<sup>メン</sup>は<sup>ハ</sup>灰<sup>ハイ</sup>黒<sup>コク</sup>色<sup>シキ</sup>、  
 腹<sup>ハク</sup>部<sup>ブ</sup>は<sup>ハ</sup>白<sup>ハク</sup>色<sup>シキ</sup>。  
 顔<sup>カオ</sup>に<sup>ニ</sup>ハ  
 千<sup>チ</sup>ド<sup>ド</sup>リ<sup>リ</sup>目<sup>メ</sup>ウ<sup>ウ</sup>ミ<sup>ミ</sup>ス<sup>ス</sup>×<sup>×</sup>科<sup>カ</sup>の<sup>ノ</sup>海<sup>ウミ</sup>鳥<sup>トリ</sup>。  
 大<sup>ダイ</sup>き<sup>キ</sup>さ<sup>サ</sup>は<sup>ハ</sup>ハ  
 「<sup>ナ</sup>善<sup>ゼン</sup>知<sup>チ</sup>鳥<sup>トウ</sup>」<sup>ナ</sup>は<sup>ハ</sup>、  
 ア<sup>ア</sup>イ<sup>イ</sup>又<sup>マタ</sup>語<sup>ゴ</sup>で<sup>デ</sup>突<sup>トツ</sup>起<sup>キ</sup>の<sup>ノ</sup>意<sup>イ</sup>で<sup>デ</sup>あ<sup>ア</sup>る<sup>ル</sup>。  
 解<sup>カイ</sup>説<sup>セツ</sup>さ<sup>サ</sup>し<sup>シ</sup>て<sup>テ</sup>い<sup>イ</sup>る<sup>ル</sup>。  
 (同<sup>ドウ</sup>真<sup>シン</sup>因<sup>イン</sup>版<sup>バン</sup>8<sup>ハチ</sup>版<sup>バン</sup>へ<sup>ヘ</sup>善<sup>ゼン</sup>知<sup>チ</sup>鳥<sup>トウ</sup>参照<sup>サウジョウ</sup>)  
 同<sup>ドウ</sup>な<sup>ナ</sup>お<sup>オ</sup>、  
 日<sup>ニチ</sup>善<sup>ゼン</sup>知<sup>チ</sup>鳥<sup>トウ</sup>と<sup>ト</sup>い<sup>イ</sup>う<sup>ウ</sup>鳥<sup>トリ</sup>に<sup>ニ</sup>つ<sup>ツ</sup>い<sup>イ</sup>て<sup>テ</sup>、  
 こ<sup>コ</sup>う<sup>ウ</sup>



頁の右半分に掲載する



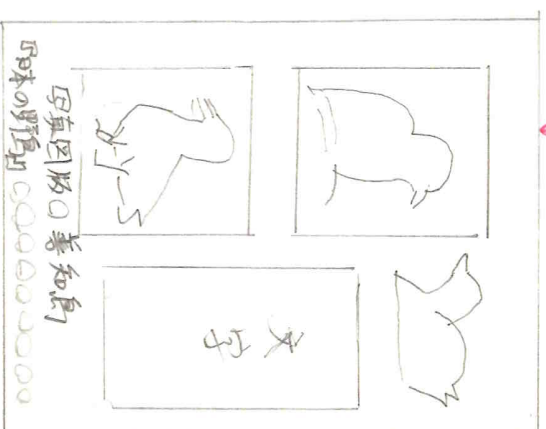
⑩ 天売

橙色のくちばしを持ち、体が黒っぽいずんぐりした大形の海鳥。北太平洋の沿岸地域で繁殖。日本では北海道天売島、大黒島、宮城県足島など北日本の数カ所の島でコロニーを作り、多数繁殖している。冬期には南下する個体があり、全国の海上で少数が見られる。

**生活** 沿岸性の海鳥で、岸から数メートルの海上で生活する。巧みに潜水し、魚、イカなどを捕える。繁殖期には島でコロニーを作って営巣する。草地に巣穴を掘り、枯れ草などを敷いて1卵を産む。巣穴は直径15センチ位で、深さが2メートルに達することもある。抱卵個体以外は明け方に島を飛び立ち、昼間は海上で生活する。夕方になると島の近くの海面に集まり、暗くなるとともに次々に飛び立ってコロニーに戻ってくる。着地や、地上を歩くことは上手ではない。青雛中の親鳥は、数匹の小魚を口にいっぱいにくわえて戻ってくる。その魚をカモメ類に横取りされることもある。産卵期は4～6月、抱卵日数は30日位である。

**声** 集団繁殖地では、日暮れとともに沖合から帰ってくるこの鳥の羽音がすさまじい。しかし、鳴き声を出すことはほとんどなく、地上で「ググッ、ググッ」と低い声を出す程度である。繁殖期以外に鳴き声を聞くことは、まずない。くちばしは橙色で、夏羽ではつけ根に突起がある。腹部が淡色である以外は全体が黒褐色で、夏羽では顔に2筋の白い飾り羽が出る。

**見分け方** くちばしは橙色で、夏羽ではつけ根に突起がある。腹部が淡色である以外は全体が黒褐色で、夏羽では顔に2筋の白い飾り羽が出る。



1頁内、以下の配置で掲載したい。

『日本の野鳥』山と溪谷社、1992年4月(15刷)発行、317頁参照

写真図解 811 善知鳥



鳥の上に配る

5,589<sup>P</sup>

が、鳥

夏羽 4月中旬 山形県庄内浜 ぐちばし基部の突起と白い飾り羽は冬羽ではなくなる。

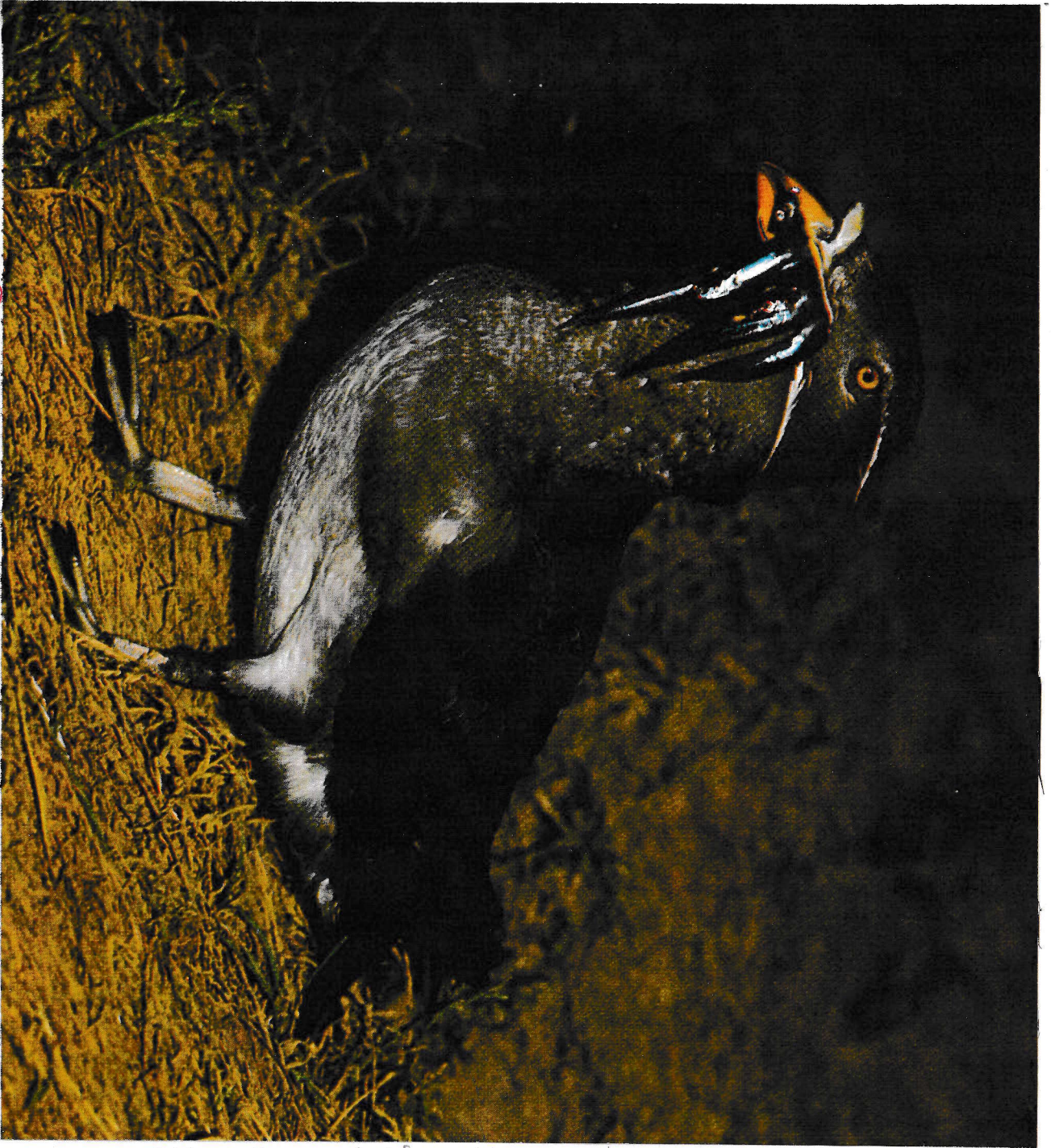




夏鳥 夏羽

5,590P

成鳥



夏羽 7月上旬 北海道天売島 夜になると餌の魚をいっぱいわえて、土中の巣穴へ戻る。

てうり

えさ

とちやう

すあな

もと

利尻島の南約50km

(第13巻) 246P-1/5

357



千総国の真間の年記  
万巻1+207頁  
巻3-431~433

棟方志功の「善知鳥神社」4頁上  
青森県生小

ボスカリット62

60 1985 1993  
516 194 1897  
44 44 96

増田手古奈の句碑  
善知鳥神社の境内には「増田手古奈」  
本名「増田義男」一八九七年（明治三〇）  
一九九三年（平成五）の句碑がある。昭  
和六〇年（一九八五年）に設置。  
石碑には「  
みちのくの 善知鳥の宮の 小町草  
と刻まれている。  
青森県南津軽郡大鰐町出身の増田手古奈は  
「東京帝大医学部卒業後、家業の増田医院  
を継ぐ。一方で、俳人高浜虚子（一八七四〜  
一九五九）の指導を受け、俳誌「十和田」を  
主宰し、県俳壇の発展に貢献した。  
という。（善知鳥神社の冊子参照）  
善知鳥神社に参詣した増田手古奈は、神域  
内で美しい花を咲かせている「小町草」を  
目にしたのである。  
その時の「大きな驚き」と、「予期せぬ感  
動」とを歌ったのではなかろうか。



・おそろく、増田手古奈は、善知鳥神社と  
小野小助とのあいだに、深い関連性があるこ  
とも、かなく精しく知っていたのだろう。

・この句碑は、昭和六〇年（一九八五年）  
に建立されたというのだから、増田手古  
奈が生きていた時の設置だということにな  
る。

・増田手古奈が作った多数の俳句のなかでも  
この句こそ、手古奈自身が最も大切に思っ  
ていた句ではない。

・また、増田手古奈以外にも、青森市および  
その近郷には、詳細を知悉している者がおら  
れるのではなかろうか。

＊

■なお、

「善知鳥神社の境内にこの句碑が設置され

てゐるし

というところから推し量ると、日善知鳥神

社の神職者も、感慨深い思いを抱いたのだ

ろう、と察せられる。

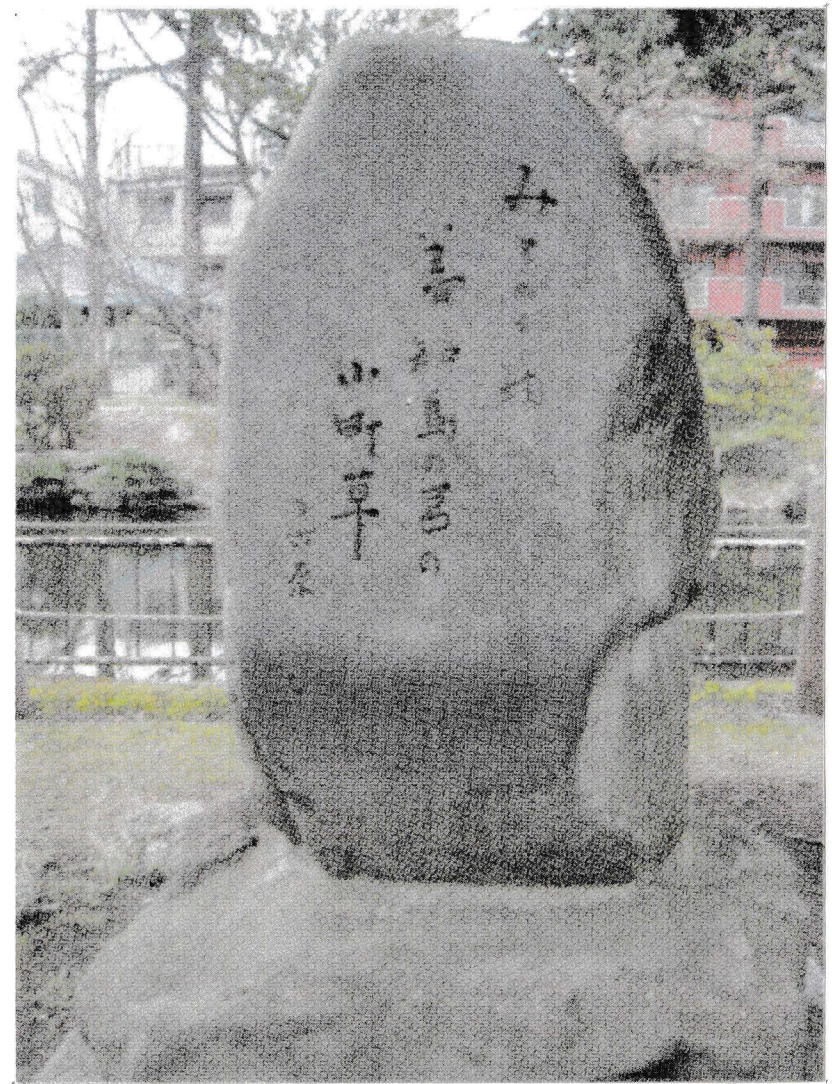
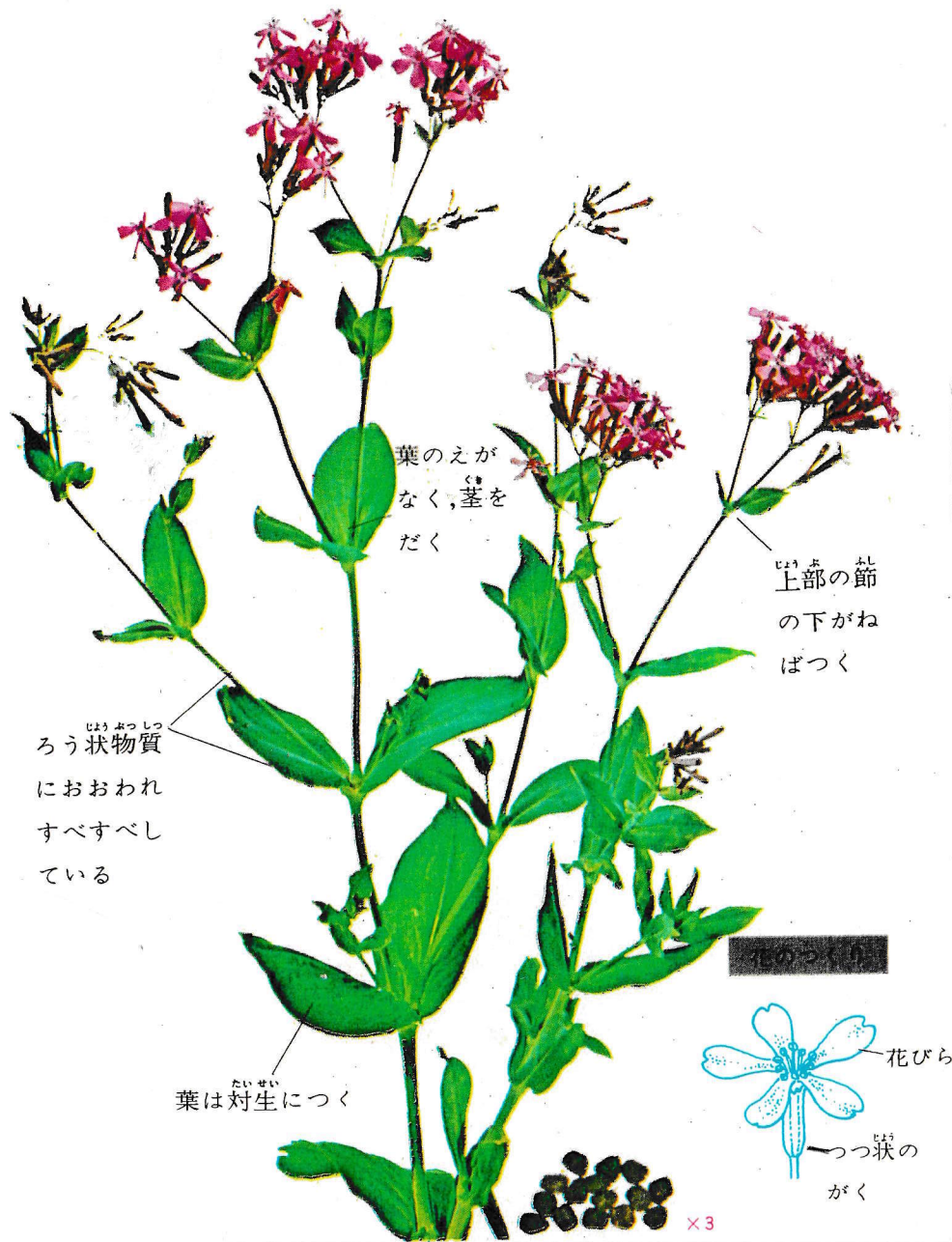
＊



因みに述べると		小町草（別名）		虫取撫子		ナデシコ		科の越年草		南ヨーロッパ原産		茎の高さ約		五口セシ		葉は卵形で白粉を帯びる		晩春、茎		頂に紅紫色か白色の小花を密生		茎の節の下		部に粘液を分泌し、小虫を付着させるが、食		虫植物ではない		性質が丈夫で、雑草として		はえている		という		（「広辞苑」）		「原色学習ワイド図鑑」		8花・作物、学術、34刷、15頁、192頁参		照）		小町草の花が群れをなして咲いているのは		実に美しくい	
---------	--	---------	--	------	--	------	--	-------	--	----------	--	-------	--	------	--	-------------	--	------	--	----------------	--	-------	--	----------------------	--	---------	--	--------------	--	-------	--	-----	--	---------	--	-------------	--	------------------------	--	----	--	---------------------	--	--------	--



ますだて こな  
増田手古奈句碑  
昭和60年



小町草

碑文「みちのくの善知鳥の宮の小町草」

「原色学習ワイド図鑑」8 花:作物、学研、15頁参照。

(第13巻) 246<sup>上</sup>-5/5



5576 上

「奥州八十島、奥州玉造の小野など、今ではどこかわからぬが、とにかく陸奥を舞台にしている」  
という。(「小野小町追跡」片桐洋一、笠間書院、一二三頁参照)

### ゐての島 (上洛)

光孝天皇の血を引く大切な息子が亡くなり、大江惟章と小町と、息子の嫁とには、幼い可愛い盛りの女の子が残さ

れた。  
忘れ形見であるその子は、すでに輝くばかりに美しく、しかも利発きわまりもなかった。先が楽しみな子であった。然るに今度は、夫大江惟章が病に倒れ、そして亡くなつた。

もはや、たのみとする者は誰もいなくなつてしまった。涙を捫ひて臥して慄慄へ、腸を断ちて起きて喔咻ぶ日々が続いた。  
そんなある日、小町は一人、つぶやいた。

「この子は女の子なのだから、命をねらわれることはないわ。……そうよ。そんなのよ。この娘をこのような鄙の地で育ててはいけないのよ。一刻も早く、小野の里へ連れて行かなければならないのよ」  
かつて、母衣通姫が小町を連れて近江国の小野の里を訪

5.591P

(第13巻)

247

ねたように、——小町も又、孫娘を連れて、近江国の小野の里を訪ねようと思つた。

小町は早速にも、陸奥国に赴任してきていた小野朝臣の邸宅へと足を運び、相談した。

「それはよい考えです。都にいる小野朝臣への手紙を持ってお行きなさるがよい。都でこの子をきつと立派に育ててくれるでしょう。そしておばあ様らは、近江国の小野の里でお暮らしになるのがよろしゅうございます」  
こうして、小町らは都へと旅立つことになった。

\*

陸奥国の小野朝臣は、小町がこの国を去るうとする時、別れを惜んでこう言つた。

「ぜひにも、歌を一つ所望したいものです。『ゐてのしま』という題で、詠んでいただけないでしょうか」  
群書類徒本『小町集』に、こう記されている。  
ゐてのしまといふ題を

おきの井でみをやくよりもかなしきは  
都しまへの別也けり

なね、「おき」は、「おき火」ともいひ、赤くおこつた炭火、熱い灰などという。(「古今和歌集」日本古典文学全集、

小学館、四〇八頁、注二参照)

362



「沖に浮かんでゐるゐるの島を見る機会は、もう決して無  
いでしょう。「おき」(熱い灰)といえは、息子の遺体を  
焼いて葬った時の様子がまざまざと思ひ起こされます。そ  
して、身を焼くよりも悲しいことは、息子らが眠っている  
この陸奥国から、<sup>宮様の千ともいづき名をもつ</sup>都島へ  
の別れです」  
●なるほど、「ゐてのしま」がどこを指しているのかは？  
きりしないが、「ゐてのしま」と歌っているのだから、  
「沖のゐて」の意であつて、沖に浮かぶ「ゐて」という名の  
島」のことにように思われる。  
●また、「ゐてのしまといふ題を」とあるところを見ると、  
——誰かが、小町に歌を詠むように勧めたものと解される。  
●そしてもしもそうだとすると、「ゐてのしま」は、その  
名を聞いただけでどの島のことか理解できるほどによく知  
られていたのだらう、と想察される。  
\*  
■もつとも、『古今集』墨滅歌、一一〇四には、  
おきのゐ みやこしま  
小野小町  
おきのゐて身を焼くよりもかなしきは  
都島辺の別れなりけり  
とある。(「古今和歌集」日本古典文学全集、小学館、四〇八

頁参照)

そして、この歌の「おきのゐ」・「みやこ島」について、  
次のように説示されている。

『大日本地名辞書』(吉田東伍著。一九〇〇～〇七年刊)に  
よれば、陸前(宮城県)の松島・塩釜湾に所在する島名で  
あり、「浮島」も含めた「八十島」の名でも小町説話とは  
因縁がふかく、奥州(白河関以北の磐城・岩代・陸前・陸中・  
陸奥の五ヶ国。今の福島・宮城・岩手・青森の四県)の有名  
な歌枕として定着していた。(「能因歌枕」「八雲御抄」)

という。(「小野小町歌」小林茂美、桜楓社、二八二頁参照)  
とすれば、小野小町は、陸前の松島・塩釜湾あたりで  
「おきの井で……」の歌を作ったのだらうか。

そうかも知れないが、それでは、  
〈小町は、おきのゐ(の島)、および都島(という名の島)  
を後にして、誰と別れ、どこへ向かつたのだらうか〉  
と不審に思われる。

この物語では採用しない。

■また、因みに述べると、

羽後国九郡の一つである「鮑海郡」(北は由利郡、東は  
羽前国最上郡、南は羽前国東田川・西田川二郡、西は日本海)

について、

5,592<sup>p</sup>



「和名抄安久三」と註し、大原・飽海・屋代・秋田・井手・遊佐・雄彼・日理（由理）・餘戸の九郷を載す。蓋し今の由利郡の南半に亘れり。近世私に割て、南を遊佐郡、北を由利郡といくり。云々」

という。（『帝國地名辞典』太田爲三郎、名著出版〈飽海郡〉。

「和名抄」〈出羽国飽海郡〉（参照）

つまり、羽後国南端部（現在の山形県北端部）あたりに「井手」という地名があったことが分かる。

とはいえ、この「井手」が、「ゐての島」「沖のゐて」と呼ぶに相應しいところなのかどうか、詳しくは分からない。

「ゐての島」もしくは「おきのゐ」という名の島がどこにあったのかは——今となつては、全く知るすべがない。しかし、仮りにこの物語では、

〈陸奥国東北部に斗出（長い柄のついたひしゃく状に突出）する下北半島（斗南半島ともいう）の最北端部の山塊が、平安時代前期のこの当時、「ゐての島」または「ゐの島」と呼ばれていたのであるう〉

と考えてみることにしたい。（『帝國地名辞典』太田爲三郎、名著出版〈下北郡〉〈斗南〉。「広辞苑」〈下北半島〉〈斗南半

島〉（参照）

5,593<sup>p</sup>

第554図

むつ市あたりが平地になつているので、陸奥湾の南岸から北方を望むと、下北半島最北端部の山塊は海上に浮かんでいるように見える。つまり、「島」のような趣を呈している。

尚、後代のことながら、室町時代の永祿の頃、糠部郡の北を割き「海上郡」とし、次いでこれを「北郡」に改めたという。（『帝國地名辞典』太田爲三郎、名著出版〈下北郡〉（参照）

海上に浮かんで見える下北半島最北端部の山塊の中央には、「恐山」があり、——死霊の意中を述べることの出来る「いたこ」（市子・神巫）と称される巫女たちの奇習がある有名である。（『広辞苑』〈恐山・いたこ・市子・神巫〉（参照）

■ ほんの参考迄に述べてみたいことがある。

● 恐山の「恐」という字の類語（類似的意義をもつ語）に「畏」という字がある。

そして、この「畏」という字は、「ゐ」と発音する。

（『大字典』上田万年、講談社〈恐〉〈畏〉（参照）

「恐山、つまり「畏山」のある海上の山塊を、——「ゐの島」もしくは「ゐての島」と呼んだとしても、不自然ではなさそうに思われる。

● また、「ゐて」と「いた（こ）」とは、かなり似ていると

恐山 813 恐山 813 恐山 813

5598<sup>p</sup> 442<sup>p</sup>

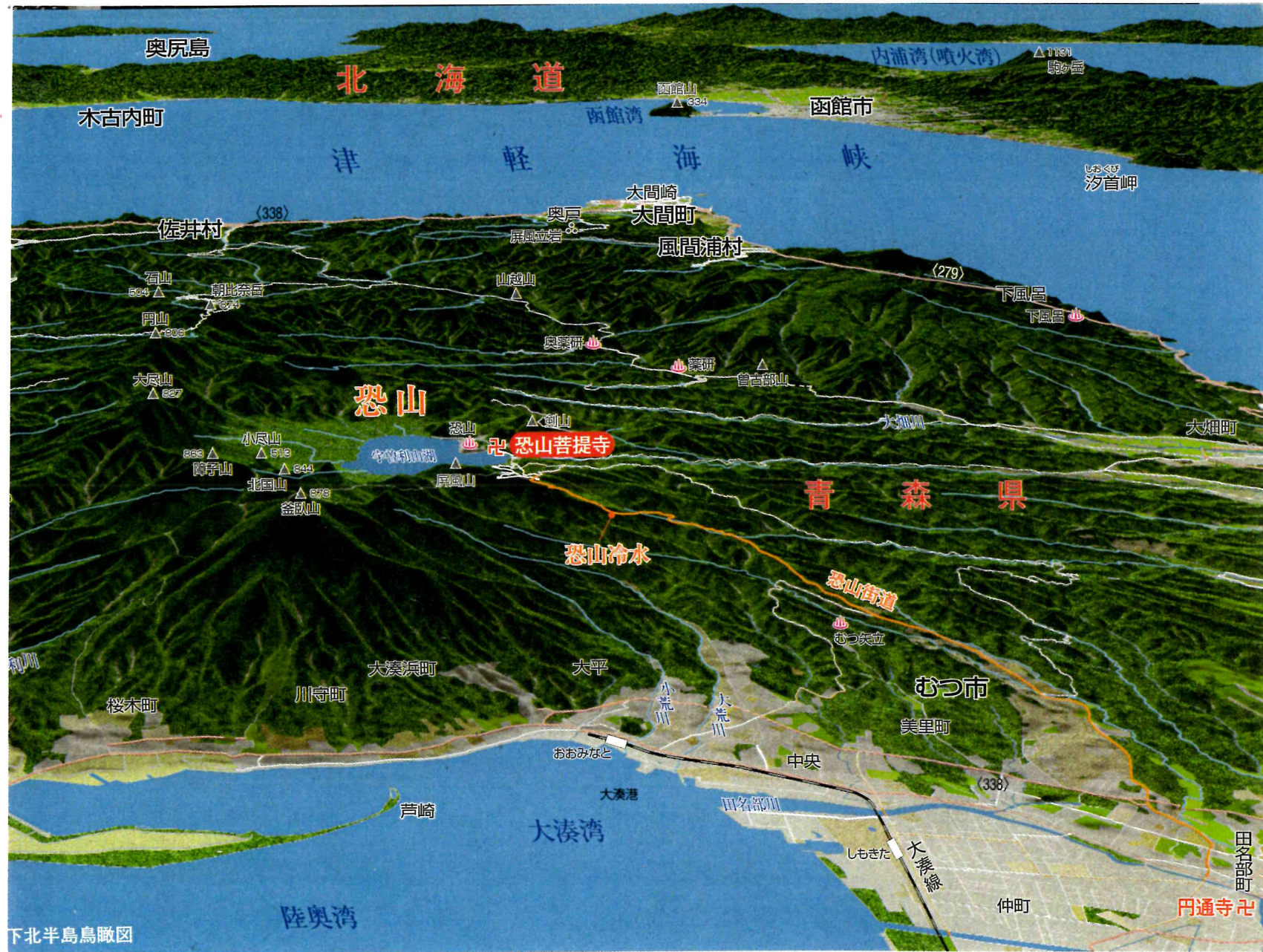
5594<sup>p</sup> 1/2

249



5,594<sup>r</sup>

・カラー  
右頁の上半分は  
大きくはみ出して  
掲載下さい。



1304 1404 第554回 おおしくちゅうかんすい  
『地図でめぐる神社とお寺』 武光誠 恐山鳥瞰図  
帝国書院、平成24年7月12日発行、23頁参照 250<sup>p</sup>



カット

5,595P

カラー

右頁の下半分に  
大きく掲載下り

カット

カット



1409

地獄

写真図版 8/2

おそれさん

山

地獄

硫黄の臭いが立ち込める荒々しい岩場。風車がカラカラと乾いた音を  
たてる荒涼とした風景が広がる。

1306

たけみつまこと

『地図でめぐる神社とお寺』武光 誠 帝国書院 平成24年7月12日発行 25頁参照

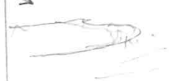


カット ←

5,596 P

カラー

左頁の下半分に  
大きく載せて  
下さい。

	恐山 鳥瞰図
	恐山の地獄



↓  
カット

↓  
カット

極楽浜 1424 写真図版 8/3 恐山の宇曾利山湖 (極楽浜)

1204 宇曾利山湖は、強酸性のカルデラ湖。白砂の浜辺に点在する死者供養の石仏や積み石が独特の光景を見せる。

1304

『地図でめぐる神社とお寺』武光誠 帝国書院 平成24年7月12日発行 22頁参照  
252



智證大師 卷13 226 (第13卷) 253  
慈覚大師 (七九四〜八六四) によって建立され  
「恐山霊場の本殿である地藏堂は、清和天皇の貞観四年  
(八六二)、慈覚大師(七九四〜八六四)によって建立され  
たと言ひ伝えられている」  
という。「青森県の歴史」宮崎道生、山川出版社、四七〜四  
八頁(参照)

■「ゐての島」を題として歌を詠むように勧められ、  
『おきのゐて』という発句が心に浮かんだ途端、……  
小町は、死んでしまった息子を思い出したのだろう。  
「あなたを陸奥国に残して行くのは、身を焼くよりも悲し  
いことです」  
悲しいという言葉の奥の、切り焼くような苦悶が伝わっ  
てくる歌である。

■一方、『都しま』は、『都』のことであって、『平安京』  
を指しているのだからと思われる。  
「島」は、国または一地方の意であり、万巻三二五五の  
柿本人麿の歌、  
天離る夷の長道ゆ恋ひ来れば  
明石の門より大和島見ゆ  
等の例がある。「萬葉集事典」佐々木信綱、平凡社、五四七

いえよう。

例えば、手という字は、「て」とも「た」とも訓める。

(手紙・手折る等)

「ゐての島」の巫女だから、「ゐて(こ)」、「ゐた(こ)」  
と呼んだのであろうか、などとも想像されるが定かでない。

なお、東北地方には、「どじょっこ」「ふなっこ」「隅こ」  
「手こ」「唄こ」「姉こ」などど、何にでも「こ」をつける  
風習があつてよく知られている。

■もしかしたら、平安朝当時、  
『ゐての島』(ゐの島)は、「下北半島最北端部の山塊」。  
『玉造り江』は、ちよつといびつな、造りかけの勾玉の  
ような形をしている入り江「陸奥湾」。(群書類従本「小町  
集」三七番歌〈みちのくの玉造り江にこぐ舟のほにこそ出でね  
君を恋ふれど〉(参照)

●『玉造の小野』は、「陸奥湾近傍の小野」。  
●『八十島』は、陸奥湾南岸から北へ向かつて突出する  
「夏泊崎」の西岸沿いに点在している小さな島々、  
のことを指していたのではなからうかとも思われるが、い  
うまでもなく詳らかでない。

\*尚、八甲田山(一五八四m)の山頂から、北の方角眼下  
に、美しい勾玉状の「陸奥湾」を一望できる。

実に雄大な、

5,597P



頁<やまとしま>参照)

つまり小町は、「ゐてのしま」という題で歌を詠んでほ  
しいと言われた時、「ゐて」と「しま」との二つに切り離

おきの井でみをやくよりもかなしきは

都しまへの別也けり

と歌ったように理解される。

「悲しいけれども、都へ行かなければならないのよ。あな

たは帝の皇子なのですもの、きつと分かっで下さるわね。

……もう、おそろくここへ帰って来ることはなり、お墓参

りさえ出来ないでしょうが、どうかこの陸奥国から、あな

たの娘の無事を見守っていてやっで下さい」

小町の歌を聞いた者たちも、皆、涙したことだもう。

ところが、この「別れを悲しむ歌」は、後代になって、

——違った意味に解釈されることとなってしまったようにで

ある。  
▲別述の

■先に述べたように、『古今集』墨滅歌、卷第十、物名部

一一〇四には、こう記されている。

おきのゐ みやこしま

小野小町

おきのゐて身を焼くよりもかなしきは

5,598<sup>P</sup>

254

都島辺の別れなりけり

「真っ赤に燃える情熱によって身が焼かれる思をするよ  
りももっと悲しいのは、都と遠い島とに引き離される別れ

だったのです」(『古今和歌集』日本古典文学全集、小学館、

四〇八頁)

■そしてまた、『伊勢物語』第一一五段には、こう述べら

れている。

むかし、陸奥の国にて、おとこ女すみけり。おとこ、

「宮こへいなん」といふ。この女いとかなしうて、馬のは

なむけをだにせむとて、おきのゐて、都島といふ所にて、

酒飲ませてよめる。

をきのゐて身をやくよりもかなしきは

宮こしまへの別れなりけり

「おきのゐて、都島」は所在不明ながらも、陸奥国(奥羽

地方)の地名だということになっている。(『小野小町追跡』

片桐洋一、笠間書院、三二一―三三頁参照)

なお、『伊勢物語』は在原業平によって作られた、とす

る説がすでに平安朝末から存在しているにしても、——そ

の全てが業平によって書かれたわけではなさそうである。

(『竹取物語・伊勢物語・大和物語』日本古典文学大系、岩波書

店、八一―八九頁参照)



~~小町の孫の歌~~

先にも述べたように、『愚見抄』および『鴉鷺記』には、

鴉路語 (物語) 鴉路合戦物語) には

後尾にな  
（伊勢労働語）  
（いせものがた）  
（鬼見抄）  
26

**(ト)** ① 実物に、どう書いてあるのか。  
② 図事鑑で、四二五頁。其の二三

●なお、本居内遠（もとぢりうちとく、江戸後期の国学者、一七九二～一八五五）は、『小野小町考』の中で、

「小町がうまごの歌見えたれども、糸図に載せず。うまご



とある

(鴉路物語)

た  
おののけはやとわびげんも  
法ありとて召さしに  
らざりしとき  
智證大師御覽まゝ  
野の若草に命を  
都にさまよひ  
は  
人との心を悩まし  
②「小野小町は  
若く盛りなりし時  
盛なりしといへども  
土地田舎に  
関寺の辺に  
夢き住居を  
寺にて七日の御説  
身の有様を取ちて参  
身のかはら召す事は  
誠に哀れに覚え

20P年と  
幾度でも

「くは」とある  
大坂「は」  
幾度となく



小野小町 264<sup>p</sup>の後  
5.12.3⑤

とい  
 能  
 関寺小町  
 の構想  
 は  
 概略  
 次の

歌道の達人と云われている老女の歌物語を聞きたる近江國関寺の僧が、久世祭の日に、

ト、その老女を訪ねる。  
(第555回) 因参照

老女は、問われるままに色々と和歌の吐をした。

へかるに、  
 僧が、<sup>なみを</sup> <sup>(こい)</sup> <sup>またおも</sup> <sup>かな</sup> <sup>なみた</sup> <sup>あせ</sup> <sup>い</sup> <sup>い</sup>  
 他ひぬれば身を考ふ草の根き絶えての一首をあけりと

い  
は  
聞は涙の故草の又更なるる悲いさよと涙に唄へた

この老女が田であることを示す

に手を教へ、庵を出た小田は、  
隣寺へ至る。

川野  
川野  
はら  
若  
頃  
の華  
や  
か  
な生活  
を  
語

と共に  
えんが  
たなはた  
まつ  
ちご

関寿（まゐり）ての宴（ようす）半は……七夕（しちせき）の祭（まつり）りに租（そ）兎（う）た（き）ち

か無き舞う様子  
お見ていた川野は  
自分も興

に 乗し 若し 五節の 舞を 俵へて 舞った

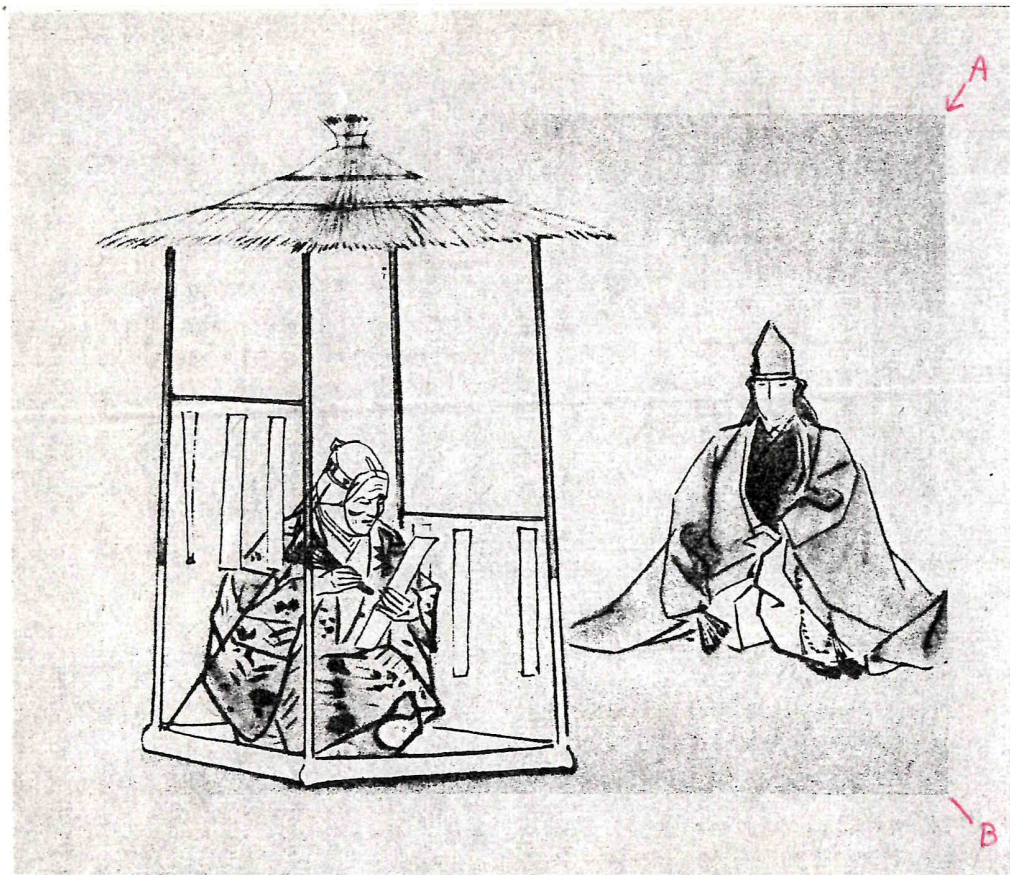
小田は杉を頼りに、なから、ま、とせの

ス  
め  
く  
足  
を  
ふ  
み  
し  
め  
て  
  
具  
命  
に  
無  
知  
し  
候  
す  
る  
の



頁の上半分に、限度一杯大きく、左右に、はみだして配置ください。

5.602 P.



第555図 [能]『関寺小町』の一場面

『関寺小町』観世左近 檜書店 昭和62年8月25日発行 2~3頁参照

※著作権  
許諾を  
もらってお  
下さい。

お願い。\*左端は、庵の中にある小野小町の様子を示す。

- AとA'、BとB'を突き合わせて、一枚の写真にしてください。
- 突き合わせた縦線が、分からないようにお願いします。



大蛇 1644  
大蛇 576  
大蛇 555  
大蛇 555  
大蛇 555  
大蛇 555  
大蛇 555  
大蛇 555  
大蛇 555  
大蛇 555

大蛇 13頁右 5行

5,603 P

だ っ た。  
も と より、 穴 窠 (美 しく た お や か な さ ま)  
嬋 娟 (顔 や 姿 の 美 しく あ で や か な さ ま) の 美 び  
は す で に 去 っ て、 あ さ ま ー く い た ま ー く、 目 め  
も 当 て ら れ る 有 様 だ は あ る が、 ー か し、 彼 女 の  
舞 姿 に は 下 昔 を 思 ば せ る 妖 艶 華 麗 な 白  
い か 漂 っ て い た。

然 る 程 に (さ て) 初 秋 の 短 夜 は や 明 々

の 関 寺 の 鐘 戸 鳥 も 頻 り に 告 げ 渡 る  
暇 (別 れ の あ い さ つ) 申 ー て 帰 る と て  
杖 に 紐 り て よろ よろ と ー も と の 菓 屋 に 帰 り

け り 石 云 々  
と い っ た 筋 書 き で あ る (関 寺 小 町 観 世

左 近、 檜 書 店 昭 和 六 十 二 年 八 月 二 十 五 日 癸

行 参 照

関 寺 での 七 夕 の 祭 り の 後 だ れ か か 下

星 祭 り の 時 の 様 子



片相同洋一  
小野小町道路 68<sup>km</sup>「公里」にある

「頻りに」前1行



FK

夏公至の

HN

「秀に出づ」と言うの序となつてゐる。  
 13.5 AM へ帝の御言葉に従つて、遠いミキノオク  
 (陸奥)へ逃避して隠れ住んでゐたころ「  
 陸奥の玉造り江(陸奥湾)に浮かんで漕ぐ舟  
 の帆柱を目にたものでしたか」  
 私は、「秀にこそ出さないのです。君を慕  
 い慕つておりますけれども」  
 といった意味なのではなからうか。「広辞  
 苑」へ陸奥(ミキノ)の省略参照)  
 (水)

異口同音に  
 野小町のことを、  
 いや、  
 白あはれ  
 と言ふため、わがわが都からやつて来るかの  
 ような感さえあつた。  
 私は、そんなにも白あはれに見えるのか  
 小町は歌つた。

1187441  
269  
115411  
115411  
き=せ  
115411

小町町  
2740  
持子一  
未一持子  
にきかひ  
助子

大 陸奥 = 341 枚  
の約



古今 353頁

いし みたく 3行 群を  
石川 啄木 3行 群を  
3行 書き下ろし 作った

5,606 P

小野小町 再版

187頁

小町 192 F 花の色はうつりけりな

花 恋う

古今 353 P  
小町集 519 P

あはれてふ 言の葉ごとに 置く露は  
昔を恋ふる 涙なりけり

(「古今集」卷第十八 94番歌。群書類従「小町集」)

13.5 ON 大勢

と いう言葉も聞きたびごとくに、目に浮か

る 露は、昔を恋ひ慕う涙なのです

＊ 一言葉を「葉」に見立てたので、「置く露」と

いっただのである。

古今集のこの歌に続く小野小町の歌を

載せておくことにしよう。(以下 古今和歌

集 小町集 昭和六十二年十二月第十版発行 三五三―四頁参照)

(941) 世の中の憂きものは 告げなく

まづ知るものは 涙なりけり

13.5 ON 私はこの世の憂きものすら 告げてや

覚えはないのだけれど 涙というものは、

真先に水を知るとみえて、事があれば

13.5 ON 1字下げ (942) 世の中は 夢かうつつか

うつつとも 夢とも知らず

13.5 ON ありてなければ 現実なのか

13.5 ON この世は、夢なのか、それとも現実なのか

13.5 ON どちらともはつきりない とうせへ有

水たのめいきにも似た調へは 絶妙である。(「小野小町追跡」片桐洋一







小野小町は「当初の間こそ気を使ってわざ  
 わざ出向りて来る者達と程々のおつきあひも  
 していたものの「……」とん「……」とん「……」  
 訪れる人が多くなり「やがて嫌気がさしたの  
 で」はなかろうか  
 〇私は「そんなにも口あわ水に見えるの  
 か」ら✓  
 ・小野小町は「世の煩わしさを厭い旅に出で  
 たような印象を受ける。